

日本敗戦となつて満州国瓦解となり、北滿の開拓団は大連に向けて逃避した。ソ連軍の爆撃・暴行・略奪・死没者続出、阿鼻叫喚のさ中、末の子供の洋子さんが死亡、次に三歳の節子さんも死亡、残る三人の子供を連れて大連に着いて一年半、そして昭和二十一年十二月佐世保に引き揚げる事ができた。

翌二十二年十月、御主人はシベリアから傷病兵として帰国して、一人の子供をもうけた。

現在は、子供は皆大学を卒業して社会人となつている。娘さんは教員となつて、かつて若き日に静子さんが教壇に立つことを夢みたことを忘れずに、実現させたい喜び、老齢ながらその執念は偉人なる母性である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

## 回想録 夕日に祈りて

東京都 熊井昭代

昭和十四年九月二十七日、先遣隊として満州に入植した父に伴われ、トラツクの荷台に乗り目ざす大泉<sup>だいせんし</sup>し福富開拓団に到着したのは、もう夜でした。暗闇のなかを手提げランプを手にした団員の方々が「お帰りなさい」と声をかけ、温かく迎えてくださいました。新築の家は、オンドルやペチカで暖かくアンペラの敷かれた室内は、ランプの灯が反射して予想以上に明るく、親しみをもって迎えてくれました。

翌朝、目覚めた私にとって、初めてみる北滿の山野は、緩やかな稜線を描き、すっかり紅葉も終わつておりました。

本部内にある数カ所の井戸は、いずれも手巻式で、これも初めて見るものでした。水は鉄分が多く沸かすと茶色になり、生水は絶対飲んではいけないと言われ

ました。各家庭には木製の水槽があり、満人の少年が毎日水運びをしてくれました。

本部の近くにある湿地帯に一カ所だけ、こんこんと湧く泉がありました。井戸水とは異なり、大変おいしく、朝に夕にくみに行きましました。尽きることない、この清水を愛でて、団名を大泉子としたそうです。見るもの聞くもの、すべてが珍しく好奇心いっぱいの子供の少女でした。

満語も早く覚えようと目を輝かしていました。まだ児童数も少なく学校はありませんでした。天気の良い日は、兄姉と共に野山に出かけ、小川に群れをなして泳ぐ魚を手づかみしたり、山裾に広がるホウズキの原に歓声をあげ、びっしりと実をつけた紫色に輝くばかりの山葡萄に、目を見張り時のたつのも忘れて駆け回り、一日がなんと短く思ったことでしょう。楽しい日々でした。

十二月一日、家族用住宅の一部に、待望の小学校が設立されました。生徒数は六人で、その半数は我が家で占めました。兄、姉、私です。先生は隣の川崎君の

お母さんと、もう一人は、女学校を卒業されたばかりの新婚ホヤホヤの米沢さんの奥様でした。長さが二メートルぐらいの机が三脚並んだ、ささやかなものですが、先生も優しく友達に会えるのも嬉しく楽しい毎日でした。

昭和十五年三月初旬、三木校長先生が赴任されました。あまりの嬉しさに急いで、駆け出し夕暮れの凍った土につまづいて膝を痛くし、母に打身膏なるものを貼ってもらいました。

団員も多くなり部落経営へと発展しました。家族も各部落へと移転したため、児童は寄宿舎生活が始まりました。毎週土曜の午後には帰宅し、日曜の午後帰舎するので。初めて親元を離れての生活のため、夕方になると寂しくなつて、よく泣きました。

やがて山田先生が着任されました。富山県出身の若くてハンサムで、すてきな先生でした。放課後はよくバイオリンを弾いてくださり、美しい音色にうっとり聴き入りました。夏休みに帰国されました先生は、なんと美しい花嫁さんと御一緒でした。遠い記憶のなか

によみがえるグリーンと茶色のチェック柄のスーツをお召しになり、今まで見たことのない洋装姿がびつたりで、世の中で一番美しい人に思いました。赴任なさいましてからは、着物に紺の袴姿の先生は、全校生の憧れの的でした。オルガンを弾いて、たくさんの唱歌や童謡を教えてくださいました。

教室と寄宿舎が別棟になり、清水さんのお姉さんの千代子さんが寮母として勤められました。寄宿舎生活にもようやく慣れたころ、夜半突然、匪賊の襲来があるということ、急いで暗闇の中で衣服を着替え、土間において次の指示を待ちました。全身が震え不安と恐怖に泣き出す人もいましたが、節子先生の説得と激励に落ち着きをとり戻しました。一時間近い死との直面に声すら出なかつたように思います。解除の報が入ったときは、互いに抱き合い、歓声と泣き声で異常な雰囲気となり、小躍りをして生きていることを確認し喜び合ったものでした。こうして先生への信頼感と互いの友愛や互助精神が自然とはぐくまれました。

やがて校舎も狭くなり、本部から南へ一キロほど離

れた所に、新校舎が設立されることになりました。私たちも精いっぱい手伝いました。早朝から基礎となるべき所の溝掘りから、そこに入れる玉石も川から拾い毎日運びました。赤れんが造りの建物、防寒のための二重窓で、りっぱな校舎でした。数年後、ここが苦楽を共にした多くの友人や、団員の最期の場所になろうとは、夢想だにしなかつたことです。ひたすら完成をめざして汗を流したのです。

翌年の三月新校舎の完成を待たず、山田先生は転任されました。大きなショックでした。早春の肌寒い朝でした。馬車にゆられ手を振って別れを惜しまれる先生の後を追ひ、涙をふきながら走りました。やがて道が曲がり、見えなくなつたとき、みんな道路に座り込んで泣きました。男の子も女の子も泣きました。

やがて広島県出身の寿山先生が着任されました。目のやさしい若い先生でした。スケートの上手な先生は、近くの川の天然リンクで靴のまま滑ることを教えてくださいました。教室の隣が先生のお部屋で、放課後はよく絵を描いてくださいました。寿山先生にも徴兵

検査があり、甲種合格で入営なさる日がきました。お別れが悲しくて、なぜ兵隊にならなければいけないのだろうか。戦争なんかなければよいものと言って、父に叱られました。住人のない部屋はひどく寂しく感じました。

その後、島根県出身の宮本先生が着任されました。夏休みに帰国された先生は、美しい奥様と、ますみちゃんという愛らしい坊ちゃんを、お連れになりました。浜田秋子さんと交代で子守りをしました。奥様は和裁を教えてくださいました。このごろ、診療所の奥様で窪田先生がいらつしゃいました。九州出身の背の高い声の美しい方でした。新校舎落成祝いに行われる学会のお遊戯をたくさん教えてくださいました。故郷の空。メンコイ仔馬。オモチャのマーチなどなど。夕食後、庭に出て練習に励みました。

新校舎完成を楽しみに瞳を輝かせた物故者の一人一人の顔が今も浮かんできます。手をとって合せて練習に励んだ友はもういないのです。五十年という歳月をふり返るとき、そこにはいつも家族がありました。校友

がありました。目的をひとつに励んだ同胞がおります。一日として忘れたことなく、共に生きた五十年でした。心の中に生きて叱咤しつた激励をしてくださるのです。

昭和十八年十一月、大石先生が赴任されました。柔道で鍛えられたがっちりした体格で、詩吟も上手でした。放課後、男子生徒に教えてくださいました。夏の太陽がさんと沃野を照りつける七月、大石先生にも徴兵検査の報がありました。甲種合格で実りの秋を迎える十月には入隊なさいました。お別れの朝は校門の前で一列に並んで見送りましたが、悲しくて先生を見るのができませんでした。毅然きぜんとして出立なさいます後ろ姿に、きつとお元気で再会できますようにと祈ったものでした。開拓団でも召集される人は多く、若い男の人はほとんどいなくなりました。

後任として新京から中山先生が赴任されました。お話が上手で、よく新京の学校の話なさいました。大都会から、このような山奥できつと寂しかったのです。八月に入って中山先生には召集令状がきませんようにとの祈りも空しくついにきました。終戦の一週

間ほど前のように思われます。入隊までの日数もないということ、早朝、見送りの私たちに拳手の礼をさされ、ニツコリと笑って別れを告げられました。いさぎよく馬上の人となられ走り去られたお姿が、今も鮮明によみがえります。思えばたくさんの先生との訣別がありました。

昭和二十年八月十五日、夏休み中でしたが、例年のごとく農作業や家畜の世話があるため、高学年は交代で登校しておりました。夕刻、本部から帰られた校長先生の表情はけわしく沈痛でした。「全員明日十六日帰宅するように、どんな事態にあつても日本人として、りっぱな最期を遂げるように、万が一の場合は、これを飲みなさい」とピンク色した粉末二包が各々に配られました。ただならぬ気配に足がガクガクしました。日本の敗戦は告げられませんでした。翌朝、各々自宅へと帰途につきました。三木校長先生も校舎も寄宿舎も、この日が最後だとは夢想だにしませんでした。八月十六日、旧盆でもあり、ハルビンに行つていた姉も帰宅しており、久々に家族全員が揃つての夕食は

楽しくにぎやかでした。我が家の最後の夕食だらんとつたのでした。明日からの運命をだれが予測できたでしょう。

八月十七日、朝から炎天の夏空が広がり、暑い夏の昼下がりでした。二人の弟は友人たちと近く川へ遊びに行つておりました。突然の本部からの連絡で「ソ連軍が侵攻中、大至急山中に避難するように、本部もこれを最後に全員避難する」というのです。静かだった部落は大騒ぎです。老人、婦女子だけの部落です。連絡と集結に父は懸命でした。母と姉は避難準備に、兄と私は弟たちを探しに川へ走りました。声をかぎりに叫びながら、ようやく連れ戻ったときには、部落の一行は山道へ向かつて、姿はありませんでした。ひたすら山奥へ奥へと進み夕陽が沈むころだからともなく、今夜はこの辺で休むことにしようと、身の丈の倍もある草原をわけて中に入りました。疲労と恐怖で口を聞く人もありません。夜になつてからは蚊の襲来です。満州蚊は不気味に大きく、刺すと痛くはれます。草をいぶせばよいのですが、居場所がわかるので禁物です。

遠く本部の方からしきりと銃声が聞こえます。父と兄は、部落の様子を偵察に出掛けました。無事に帰ることを祈り続けました。数時間後、帰った二人の話によれば、部落の家々は、略奪され一軒残らず焼かれ、現地人がうろついでいて、危険で近寄れないということです。がっくりと肩を落とした父と兄の後ろ姿が疲れきって見えました。

明け方近く雨となり、急いで身支度をしましたが、帰る家を失った一行は、隣の開拓団（財神廟開拓団）めざして歩きはじめました。なにか新しい状況もつかめるかもしれないと、互いに励まし合いながら歩きました。途中で牛を挽いた二人連れの朝鮮人に会いました。「日本人は戦争に負けたのだから、どこへ行っても駄目だ。隣の団員もだれもいない」というのです。どしゃ降りの雨の中歩く気力もなく、草原に座りこみました。この先、生きる保証はないのです。そのとき、父は突然叫びました。「満人に惨殺されるくらいなら、潔よくここで一緒に死のう」と日本刀に手をかけました。母は驚き「なにを言わっしゃる。一生懸命育てて

きたこのかわいい子供たちをどうして手にかけれましょうや。逃げるところまで逃げて、それでもだめなときは覚悟しましょう。どうかやめてくれっしゃい」と父にすがりました。みんな声を出して泣きました。「満州に骨を埋める覚悟はできてはいるけど、果てるときは、元の部落に行つて、そこで」という意見も出まして、一行は力なく、なおも降り続く雨の中を引き返しました。

一時間ほど歩くと、もやのなかに一軒満人の家が見つかりました。事情を話すと心よく受けてくれました。地獄で仏とはこういうことでしょうか。ぬれた衣類を乾かし、大きな釜で、粟飯を炊いてくれました。雨の中を畑からありつただけの野菜をとってきてくれました。粟飯はボンボンするのですが、炊きたての暖かさ、心の温かさは飢えた胃袋に流れるように入りました。どしゃ降りの雨に冷えきった体は、ほどよいオンドルの暖かさで、いつの間にかぐっすり眠りました。

早朝、大きな人声で目を覚ますと「日本人を援助すると罰せられるから、至急出て行くように、今なら山

道をぬければ安全だ」と教えてくれました。これ以上の迷惑をかけてはいけません。受けた行為にたくさんの感謝をこめ、「シニシニ謝々」を口々に急ぎ家を出た。

夜来の雨はあがり、ぬかるみの道を黒東郷めざして歩きました。東の空がようやく明けはじめるころ、前方に急に大声を出して走ってくる数人が見えました。

死を覚悟したとはいえ、一行は、とつさに草むらに逃げこみました。すると大声で「アンチャン」と呼ぶのです。兄の呼称です。聞きおぼえのある声です。驚いてよく見ると家で働いていたニーヤでした。ほかに数人一緒でした。涙を流しながら会えてよかったです。駆けよりました。「昨日も一日中探したけど見つからず、おにぎりをみんな川に流した」と口早に言います。やはり日本人を援護することは許されないので。早く食べなさいお腹がすいたろう」と言って、差し出した二つの籠には、温かい真つ白なおにぎりが山盛りにあります。雨にぬれた草むらに、座りこみ手を取り合って無事を喜びあいました。感謝の気持ちは涙となって頬をつたいます。「死ぬ前に腹いっぱい御飯を

いただき、なんとありがたいことや」と年老いた人は泣きました。幼い子供たちは「白いマンマ」と両手を振って喜び、小さな口で無心に食べはじめました。飢えはどんなに苦しいものかを痛感しました。

朝日が昇り、木の葉に宿した水滴が金色に輝く、八月十九日の朝でした。ニーヤから日本国の敗戦を正確に伝達されました。信じなければいけないのだと思いました。更に兄を呼んで武器を提出するよう命じました。武装解除です。団員には治安維持のため、小銃が支給されていたのです。日本刀は個人の所有物でした。

「本部は拒否したので多くの犠牲者を出した。黒東郷は死ななくてくれ、その件を受諾すれば責任をもって日本人の集場所まで護衛する」と熱心に説得するのは、これから元部落に行つて自決の覚悟のできてい一行です。ここに至つて反発する気力はありません。一同素直に受諾しましたが、日本刀が一振り足りないと言うのです。家を出るとき兄が持ち出したのを見ていた人がいたのでしよう。父は道すがら絶壁の谷底へ投じていたので。その時の心境は父のみぞ知る到底

計り知ることはできませんが、とにかく数をそろえて提出する義務があるからと、その谷底まで探しに行くことになりました。

もしかしたら父や兄は、もう帰ってこないのではという不吉な予感を禁じえませんでした。一方待機する私たちの周囲では、情報を聞いて集まってくる原住民は見知らぬ顔も多く、中には殺気だち、取り上げたばかりの銃や日本刀をちらつかせながら威嚇します。必死で谷底の日本刀を探している父や兄の姿を思い、どんなことがあっても生きよう。草むらに逃げこみ川を泳ぎ逃げようとか、殺さないように真剣に頼んでみようとか、小さい頭で生きることが真剣に考えました。大きな苦境や試練にぶつかるたびに、その反動で強くなるのかもしれませんが。心配と憶測をよそに父と兄は日本刀を探しあて、無事帰ってきました。ほんの少しでもニーヤたちを疑ったことを申し訳なく、ひどく悪いことをしたように思いました。長く重い数時間だったのです。

武装解除に応じたことで、一人の犠牲者もなかった

ことに感謝しました。その夜は、ニーヤたちの部落で泊まることになったのです。部落の人たちも好意的でもてなしてくれました。「メイユウファーズ」(仕方がない)を連発しながら部落長は「別れることはつらいけど、元気で日本に帰ってください。日本では父母や家族たちも心配して待っているだろう。死んではいけない」と別れを惜しみ励ましてくれました。死を覚悟した団員たちにとつてどんなにか大きな生きることへの原動力になったことでしょう。大きな温かい心は、閉ざされた自決への死神を追い払ってくれました。つきない惜別の悲しみと、温かい大きな親切に感謝し、ニーヤたちや警備員と共に、次の目的地をめざして出発しました。

八月二十日、快晴でした。生きることへの、第一歩でした。途中、黒東郷に寄り別れを告げました。焼け落ちた壁がわずかに残り、朝日を受けて答えてくれているように思いました。察してくれたのでしよう。ニーヤたちは急がなければ、途中が危険だと言って促してくれました。大きく一礼し万感こもこも急ぎ足で

黙々と歩きました。人は涙の数ほど優しくなれると言いますが、涙の数ほど強くならなければと思ひ歩きました。別れに際し、「もし暴徒に襲われることがあつても、命の続く限り逃げるように」との激励の言葉、ふと思ひ出していました。残暑は強く道はぬかつていました。

四、五時間も歩いたころでしょうか、道路の両側に続くコーリヤン畑がざわめいて、数人の満人が出てきました。大きな怒号とともに「早く歩け襲ってくるぞ」、後部から必死の声がひびきます。時折、空砲を撃つては叫び護衛してくれました。粘土状のぬかつた道路は急ぐほど足がもつれ転倒し、全身泥まみれになりながら間一髪のところ、部落の門内に転がりこむように入ることができました。暴徒は大きな鎌に、長い柄のついた凶器を振りかざしてくるのです。鋭利な刃物は捕らわれたら最後、容赦なくふりかかることでしょう。一人の犠牲者もなく到着できたことは、自らの危険もかえりみず、護衛につくしてくれたニーヤたちや警備の方のお陰と感謝しております。ある時は馬

車が調達できたからと、深夜ひそかに移動することもあれば、連絡を待ちながら幾日も待機することもありました。こうして、賓州街の収容所に到着したのは八月も下旬の二十六日でした。

ここで知ったことは悲しい出来事ばかりでした。全校生が一丸となって汗を流した大切な赤れんがの校舎が、最期の場所となったのです。三木校長は仏壇に灯明をあげられ、奥様と幼い四人のお子様を道連れに自決なさいました。「死を潔ぎよし」と讃えられた一筋の教育者とし、選ばれたそれなりの道だったのでしよう。今はどうぞ、安らかにお眠りください。

片や西側部落の人たちは襲撃を受け、山中深く逃げたのですが、追いつめられ筆舌に尽くし難い惨禍で、先をきそつて自決されたというのです。どんなにか恐ろしかったことでしょうか。どんなにか、苦しかったことでしょうか。どんなにか、悲しかったことでしょうか。思えば六年間、寝食を共にし共に学び、小さな手に鎌を握り、鍬をふるい流れる汗の尊さを知り、収穫の喜びを分かち合い、将来の夢を語り手を取り合つて生

きてきた日々。夏休みが終わったら、赤れんがの素晴らしい校舎で会うことを楽しみに別れたものを、もう永久に会うことはできないのです。絶望感と憤りの中で一人、一人の顔が浮かんで消えました。日に入るもの耳にするもの、すべてが悲しいことばかりで、眠っている間だけ、それらから逃避できるのです。起きてみても、何にもすることのない收容所生活は、私を眠りの世界へと誘います。夢の世界ではおいしいものもあり、今は亡き友人たちとも元気で楽しく語り遊べるのです。口もきかず寝てばかりいる私を、母は心配しました。「大丈夫ヨ」と言っては寝ておりました。体力の消耗防止にも役立つのです。高粱コウリヤウ飯と大豆の塩汁だけの食事では、体力のない幼児や老人のなかでは、発病する人もあり、生活の変化とショックで精神異常をきたす人もありました。朝夕は寒さも加わり一段と厳しいものとなりました。

そうしたある日、防寒服が一着ずつ支給され、ハルビンへの移動が決定しました。ハルビンは経済の中心地でもあり、日本人もたくさんいます。帰国の日が近

づいたのかと喜び合いました。寒さに向かつて、厳しい悲しい運命の展開など知る由もない。賓州街を出て五時間ぐらいたったころ、突然、前方で銃声がとどろき、現地人の馭者が大声でわめきます。体ひとつで必死で馬車から降り、道路の両側にある溝に伏せました。馬車は荷物を乗せたまま猛然と走り去りました。取るに足りない難民の荷物です。大部分の団員は着の身着のままになりました。策略だったのか、否、真実暴徒だったのかわかりませんが、命を失わずにすんだことに感謝し、気持ちを直してハルビンめざして皆で歩きました。

秋の日は短く途中の部落で一泊することになり、元の牢獄に藁を敷き横たわりました。野宿より幸せだと思えました。ここで末弟の浩が、ジフテリアにかかり、昭和二十年十月六日、わずか二年余りの短い生涯を閉じました。毎日バスついた高粱コウリヤウ飯と大豆の塩汁はどんなにか切ないものだったのでしよう。空腹を訴え「白いマンマ欲しい」と言っては泣きました。幼い生命力は日に日にほそり、賓州からハルビンへの移動中

発病し、高熱と呼吸困難がひどく、喘ぎながら苦しみました。ハルビン桃山小学校の収容所に到着し、すぐに受診したのですが、ジフテリアでした。ワクチンなどはあるはずもなく、その夜半昇天しました。翌朝、霊安室に安置された弟は人形のようにでした。飢餓も苦痛も超越した色白の弟は、呼べば今にも眼をあけるように安らかでした。母のすすり泣きは何日か続きしました。あれから半世紀の歳月は過ぎ去りました。今も白い御飯に幼くして逝った弟を思い冥福を祈るのです。

ハルビンの収容所に入って三週間余り、日ごと難民の数は増え廊下での明け暮れが続きしました。三日ほど前から軽い咳をしていた弟の猛が、発熱し、受診しますとジフテリアだったのです。幼く体力のない弟は感染していたのです。恐れていたのが現実となったのです。すぐ父は背負って元陸軍病院と急ぎました。放心したように祈る母のそばで、不安がつのります。翌朝父は一人で肩を落として帰ってきました。気管切開まですしたのですが、幼い命の灯は燃焼しきったのでしよう。苦しみもなく、父一人に看とられ浩のもとへと旅

立ちました。父におんぶされ見送った小さな後ろ姿と、白い足の裏が最期の別れとなりました。猛、五歳十カ月の短い生涯でした。

桃山小学校の収容所も日ごとに寒さがつのり、暖房もなく越冬の対策は全くありません。栄養失調と伝染病は猛威をふるい、体力のない幼児や老人に襲いかかります。毎日犠牲者が続出しました。我が開拓団でも阿城と五常へと二分して移動することになりました。黒東郷は阿城を選びました。元関東軍兵舎跡で木炭が豊富だということです。

二人の弟を亡くし涙のかわく間もなく、妹の美恵子が肺炎で日赤病院に入院しました。十一月三日の移転のころは、妹は動かせる状態ではありませんでした。母は妹と共に病院に残ることになり、はじめて母のいない旅になりました。改めて母の存在感の大きさを知りました。当日は悪天候で粉雪は土もるとも足元から舞い上がり行く手を阻みます。日没の早い晩秋の空は、すっかり夜の帳を下ろしましたが、目的地には程遠く、転んでは起き、眠りながら夢遊病者のように歩きました。

た。そんな姿を見兼ねた兄は、私を背負ってくれました。黙々と歩く兄の背の暖かさをどんなに頼もしく、ありがたく思ったことでしょう。背で泣きじやくる私に「泣くな、もうすぐだから」と励ましてくれるのです。口数の少ない優しい兄でした。進学したかったのですが、体の弱い父を思い、断念して大家族のために働いてくれました。読書が好きでポケットには、いつも一冊の本がはいっておりました。北原白秋の詩が好きで兄でした。

十一月二十八日、粉雪の舞う夕刻でした。水をほしがったのですが、下痢をしていたので生水はいけなないと思ひ、急ぎ沸かしたのですが間に合いませんでした。末期の水なら沸かす必要がなかったものを、それを察知する能力は十二歳の私にはなかったのです。

ごめんなさいアンチャン。五十年の歳月は流れても、冷水を口にするたびに兄を思ひわびるのです。丈夫で病気などしたことのない兄でした。その前夜、母を数回呼んだそうです。苦しかったのでしよう。優しい母の看病がほしかったのでしよう。アンチャン、ごめん

なさい。

十二月八日、この日は日本人にとって、否、世界の人にとつても忘れることのできない日でしょうが、私にとつてはもう一つ悲しい日となりました。阿城にきてからも体調は悪く、母のいないせいもあつてか一段と無口になり、臥床の日々が過ぎました。兄の死後、父に急に変化があり、大きな声でどなるのです。私が物心ついてこの方、父が大声で叱るということは記憶にありませんでした。時折、大声で兄を呼んでは号泣するので。「お父さんより先になぜ死んだがけ」と繰り返し、昼も夜も大声で話し続ける日が五日ほど続き、やがて除々に声が小さくなりました。衰弱もひどく食物はおろか水分も取れなくなりました。元気な数人の方々厚意で入院することになりました。高熱の続く姉も一緒に入院することになり、私は付き添つて病院に行きました。幼い弟を一人残して心配でしたが、団員の方々は心配することはないからと、勧めてくださいました。入院すればきつと良くなると信じていましたが、これも病人がいつぱいで廊下まであふれてい

ました。数日を廊下で過ごし、室内にはいりましたが、薬品もなく治療ありませんでした。入院して二日後に、昼夜を問わず意味不明のことをしゃべり通しだったのが声も聞きとれず、時折、唇だけが動き数日後には昏々と眠りました。呼んでも、ゆすつても再び眼は開きませんでした。水分すら飲み込むこともできず、苦痛の表情もなく、下肢から硬直がありました。かすかにとれる心臓の鼓動だけが生への証あかしでした。

十二月八日夕刻でした。横なぐりに吹きつける風と粉雪の道をなんどもよろけながら、収容所まで連絡にきました。父の死と遺体は、すぐに病院から搬出しなければなりません。姉と私にはどうすることもできないのです。亡き兄を思い母を思い、頬を伝う涙は凍りつくかに思われました。果たして運んでくださる方があるだろうかという不安もあって、つらい悲しい道のりでした。

大陸の沃野に鉄をふるい開拓に光る汗を流し、第二の故郷ときめ一家だんらんの日々を夢みただであろうに、母の生死すらわからないまま混乱の異国の地に果てた

父。生きても死んでも再び祖国には帰らじと、覚悟のうえでの渡満だったそうです。後に母方の祖母から聞きました。七人の家族と共に安らかに眠りください。多くの同胞と共に安らかに眠りください。手を合わせました。

一月七日、父も亡くなり、姉も寝たきりでしたが、幼い弟を収容所に残していることが、不憫不憫で口を開けば互いに弟のことでした。入院以来二回ほど仲間たちと訪れましたが、その後はありませんでした。最初のときは、ダブダブの大人の防寒服の上着のポケットから十粒ほどの大豆をだしお土産だと言って持ってきました。刈り入れの終わった畑で拾ったのです。炭火で一粒ずつ焼いて持ってきたのです。姉と共にその小さな手を両手で包んで泣きました。帰りたくとも、もはや自力で帰る体力はありませんでした。

暮れも迫った三十日お願いして、元気な数人の方々の肩を借りて、ようやく帰ることができました。心の片隅には、何日生きられるかわからない日々ならば、姉・妹・弟、三人の時間を大切にしたい、と思う心が

大きかったです。もうずっと三人一緒にいようと手を取り合って喜びました。糞疹チフスと暖房のための炭火による一酸化炭素の害と、栄養失調で言語に尽くせぬ悲惨さでした。それでもハルビンに残った母の生存だけに望みをかけ、頑張らなければと思いました。家を出るとき、私が非常食のパンと間違え背負って出た防寒帽子がいくつか残っておりまして。物売りにくる満人に頼んで取り替えて数個の餅を買いました。

昭和二十一年元旦、三人で新年を祝いました。いい祝いを心より迎えられたのです。もはや三人にとって明日という日はないかもしれないのです。今日一日生きることに精いっぱいでした。病院から帰った姉は意識は明瞭で細かいことを氣遣ってくれました。風のためよりにハルビンの母は七日ごろ、そちらに行かれるかもしれないという嬉しい情報がありました。確実性はないのですが新年早々の朗報できつとよいことがあると信じ祈りました。

六日の夜半、姉はなにか吐いたような気配がありました。したが、苦しむ様子もなく、そのまま眠っていました。

が、しばらくして水が欲しいというので手渡しますとゴクンゴクンと飲み『ありがとう、おいしかった』と喜びました。これが姉と交した最後の言葉でした。朝、向こう側をむいて寝ている姉に声をかけましたが、返事がありませんでした。直感でした。もしやと思いい顔をのぞきこみますと、安らかな顔は、もう冷たく口元は心なしか、ほほえんでいるようにすら見えました。昨日は一日中リングが食べたいと言いました。丸い物すべてがリングに見えるようで、ふとんの柄をみてもリングに見えるのです。「一口でよいから元気になったら、きつと返すから」と懇願するのですが、真冬の収容所であろうはずもなく、願いをかなえることはできませんでした。

母の帰る七日を待ちに待って頑張ったのでしように、これもかなえられませんでした。七人きょうだいの長女として、母を助け片腕となって私たちを守ってくれました。心優しい姉でした。芳紀二十一歳青春の灯は悲しく消え去りました。ありがとうございました。お姉さん さようなら。

もし、あの世というものがあつたらば再び姉妹でありますように、そして今度は戦争のない平和な国に生まれましよう。安らかにお眠りください。

一月十七日 冬の日は短く夜のとばりは早く下ります。夕食は明るいうちに済ませます。夕食と言つても岩塩を入れた塩味の高梁飯で空腹を満たすだけのものです。後は横たわり眠るだけです。目覚めれば生きてゐることを確認するだけの毎日、そして幾日か過ぎ去りました。そんなある日の夕刻でした。裏口をたたく音に、もしやソ連兵ではと思わず身構えました。かほせい女性の声が出てだれかが戸を開けました。冷たい北風に吹き込まれるように入つてきました。靴を脱ぐのももどかしそうに、ムシロの仕切りをあけて母が入つてきました。この日の訪れをどんなに待つたことでしょうか。その願いが現実となつて、私たちの前にいるのです。夢かと思ひました。が、あまりの感動に声もでませんでした。母の膝にすがり三人手を取り合つて泣きました。「よく生きてくれたネ。母さんがきたからには、きっと元気にしてあげるから、がんばるが

いぞ」と言つて、再会を喜びました。

十一月二十三日、妹の美恵子は母一人に看取られ眠るように、この日逝つたのです。その後、母は高熱に侵され生死の境をさまよひながら、ようやく快方に向かつたとのことです。一月十六日夜、病院の窓から入り込む月光に目覚めた母は「阿城に行こう。きつとだれかが待つてゐるにちがいない」と、生存者のいることをひたすら祈つたのです。折よく訪れた連絡事務所では一カ月一回の連絡馬車がでると言うので、さつそく病院に引き返し許可を得て、馬車の時刻に間に合つたとのことでした。

父、姉、兄の死は母にとってどんなにか大きな悲しみだつたことでしょう。その悲しみに挑戦するように弟の看護に必死でした。衰弱がひどく全身冷たくなつてゐる弟に、火鉢でれんがを暖め湯タンポの代用としました。食物もやわらかく煮て与え、いつ眠るかと思うほど昼夜を問わず、一生懸命でした。陽が溶けて流れるかと思うほどの下痢も、食事も水分もとることで一週間ほどで止まりました。弟の顔に日ましに生氣が

よみがえってきました。愛情はすべてをよみがえらせるものでしょうか。特別寒い日でした。火の気のないところで一日ふとんを作りました。作りあげた後、寒気を訴えながら床につきました。

二月一日、ついに母は病床に臥しました。高熱と頭痛に苦しむ母をみて、不吉な予感が脳裏をかすめます。「お母さん死なないで」すがる私の手を取り「お前たち二人を残して死んだりできるもんかいネ、すぐよくなるから心配せんでもいいちゃ」と、髪を撫でてくれました。切なる願いも空しく病状は日に日に悪化の一途をたどりました。百メートルぐらい離れた所に診療所があり、毎日往診のお願いに行きました。膝関節だけが異状に大きく、細い足をひきずりながら、よろけては転び、ようやく起き上がりながら、何とか母の苦しみを直して欲しいと願い、一步一步必死で進みました。毎日の日課となつて一週間目「母を助けてください」と懇願する私に「診察しても薬も注射もないんだよ」と若い医師は、せつなそうな顔でつぶやきました。それでも医師は同行してくれました。聴診器をあてる

前に首を横にふりました。その日の夕刻、激しい痙攣発作がありました。「お父さん、お姉ちゃん、アンちゃん、お母さんを助けて」と必死の祈りも空しく閉じた目も口も再び開くことはありませんでした。母を呼び泣いてすがる姉弟の声も、もう届きませんでした。炭火の薄明かりに照らし出された母の顔は、神々しいまでに柔和で優しかった。

大人一人生きること困難な混乱の異国の地に、幼い二人を残して逝かねばならなかった母の心情を思うとき、半世紀経た今も涙を禁ずることはできないのです。そして母からもらった尊い命を大切に生きなければと思うのです。阿城にきて、わずか二十日余りの短い日々を病みあがりの身に、全力をかけて我が子の看護にあたり生命の灯はついに消えました。が二人の心の中には、いつまでも燃え続けております。姉弟力を合わせ強く生きてゆきます。お母さん ありがとうございました。

寒い凍えきった心の窓にも、北満の三月の風は少しずつ春を運び、少しずつほぐしてくれました。廃墟と

化した元関東軍二千部隊の、兵舎を崩し、れんがの再製作業が始まり私も参加しました。その代償として、食糧の高梁が支給されるのです。れんがにこびりついたセメントをはがすのは困難で、庖丁のような小さい金具を用いました。三日もすれば指先が割れて血がにじみます。ボロ布で指先を保護し、毎日作業は続きました。

そのうち阿城市内の八路军の病院で働けば食事は支給されるし、収容所の人たちも行っているのです、弟を連れて行きました。院長先生に直接お願いしたので、若い軍人で日本語の上手な方でした。年が若いことで難行したのですが、真剣にお願いしました。母が持参したお金もなく、配給の主食高梁飯だけでは、二人とも生命の維持は困難です。なんと少しでも生きなければならぬのです。今にして思えばむちゃな話ですが、幼稚さもある時はプラスになることもあります。それと、院長先生が理解あるりっぱな方だったと感謝しております。とにかく採用されました。昼夜を問わず懸命に働きました。広大な敷地内には教会もあって、

一斉に訪れる春は、色とりどりの花を咲かせます。寒く悲しい冬を命がけて駆けてきた私にとって、現実かと疑うほどの自然がありました。それでも、いつもどこかで戦争は繰り返されるのです。病院には毎日戦傷者が送られてきます。二カ月余りして病院は牡丹江方面に移動になりました。弟のいる私は解雇になりました。ほかの解雇者と共に院長室に行きました。「まだ子供なのに、よく働いたネ。帰国も近いと思うから弟と一緒に元気で日本に帰りなさい」と握手していただきました。温かく大きな手でした。忘れることのできない感動のひとつです。

再び収容所に帰った私は団員の方と共に、満人の畑の除草作業に行きました。仕事自体は学校での農作業で鍛えられておりましたからつらくはないのですが、早朝起きて行くのが眠くて、これが一番大変でした。オヤツにでるともうこしのパンや饅頭まんとうを弟にもらつて帰るのが大きな喜びでした。行商のパン屋のおじさんに頼んで洗濯の仕事に行きました。長い夏の日など疲れ果て、うす暗くなった道をトボトボ帰ることもあ

りました。そういうとき、弟と一緒に仲間たち（孤児）が迎えにきてくれるのです。薄闇のなかに、その姿をみつけたときは嬉しくて、心細さも疲れも忘れて泣きながら走るのです。背伸びしても、頑張っても、やはり十三歳の少女だったのです。保宏さん・勇ちゃん・徹ちゃん・そして融君温かい協力ありがとうございます。手をとり歌いながら帰った道は今もありませんか。

八月に入ってから待ちに待った帰国の噂が流れ、旧盆のころには本格的な帰国準備が開始されました。そんなある日、本部から十三歳の少女に集合するよう伝達があり、何事かと不安ながら集合場所に行きました。十数人の同年齢の少女たちが集まってきました。「満州に残り勉強しなさい。敗戦の日本に帰って親のない君たちは、どうして生きていくのですか。両親やきょうだいも草葉の陰で成長をみて、きつと喜んでくれるでしょう。日本に帰っても親戚の荷物になるだけだ」と言葉巧みに話されました。意表つくその言葉に動揺定まらぬ年ごろです。弟と共に生活の心配がないのな

ら残って、しっかり勉強しようと思ったのです。相談するにも両親のない現在、自分なりに考えての結果、残ることに返事しました。やがて本部より収容所に伝達され、大変しかられました。自分自身はしっかりしている心積もりでも、やはり子供でした。反省しました。

同村から移民し満当時も、家族ぐるみの交流があり、お世話になった秋元さんは、すぐに取り消しに行ってくださいました。ほかの承諾組も全員解消となり、帰国することができました。その大恩人の秋元さんも、すでに他界され多くの方々の愛情に支えられ、今日あることを決して忘れてはいけないと思っております。

八月二十三日、待ちに待った帰国への第一歩を踏み出した日です。団員の皆様のお陰で全員揃ってこの日を迎えることができました。阿城駅から無蓋車に乗り、振り落とされないように、しっかりと弟の手を握りました。加速される列車の上で、次第に遠のく収容所に別れをつけました。再び訪れることができるだろうか？何か大きな忘れ物をしているようで、どうしよう

もありませんでした。

八月二十五日、ハルビンを出発。二口間は列車待ちで路上で野宿でした。途中、列車の連結部分はずれ、上り坂の反動で猛スピードで逆戻りをしました。大きく揺れる度に列車内は異様な悲鳴があがります。もうこれまでと覚悟したこともありましたが、鉄橋手前で止めることができませんでした。八路軍と国民軍の境を雨にうたれながら歩きました。鎌をふりかざし隙あらばとびつたり付いてくる暴徒に、おびえながらひたすら前方をみつめ必死で歩きました。戦闘で破壊された橋が焼け落ち、濁流にのまれそうになりながら小船で渡り、雨の野宿で、全身濡れ震えながら焚き火を囲んだこともありませんでした。祖国日本に帰れるという感動は、これらすべてを克服することができました。

九月十日、壺蘆島に到着しました。各地から集合した難民と合流し、馬小屋だったという所で土間に藁を敷いて、馬さながらに乗船待ちの日々が続きました。いつ乗船できるかわからないその日を待ちながら、しみじみと日本を遠く思いました。過ぎし日、母は病床

にありながら「陸続きならば一年かかっても、二人を連れて日本に帰れるものを海があつてはネエ」と嘆いた言葉を思い出しました。「みんな一緒に帰りたかつたネ」とそつとつぶやきました。初秋の風はそつと消しました。目にいつばいの涙がこぼれないように。

待つこと十日余り、やがて乗船許可が下りました。大学の練習船「海王丸」でした。噂によれば、乗船してもどこに連行され、どこかの港に着くか、わからないと聞いておりましたのに、船内は日本人ばかりです。不安は一掃されました。海路一筋故国へと進みました。思えばわずか七年間の在満生活でした。渡満したのもやはりこの季節でした。七人の家族は、もうどこにもいないのです。さまざま思い出がよぎっていきます。戦争は多くの人々の運命を大きく変えました。どんなにか生きたかったであろう多くの同胞を思うとき、また無限の可能性と、そのエネルギーを秘めて散った若く幼い物故者をしのぶとき、絶対この惨劇を繰り返してはならないと、固く心に誓うのです。そしてこの悲しみを風化してはいけません。奇しくも生存した私た

ちが、後世に残さねばならない使命だと思ふのです。  
怒り・悲しみ・苦しみ・すべてを大きな心の糧として手を携さえ、明日に向かつて生きようではありませんか。

皆様のお眠りになる広い山野は永遠に平和でありますように、美しい花が咲き、豊かな緑に覆われておりますようにと、心から祈ります。やすらかに、お眠りください。

大陸の広野にねむる はらからの  
霊やすかれと 祈る夕日に

### 【随筆者の横顔】

昭和八年生まれの昭代さんは、富山県小摺村の農家、小路重成氏の三女として出生し、昭和十四年九月、満州開拓者として福富開拓団に入植したときは、六歳の少女である。

この年の十二月一日に待望の小学校が設立され、生徒はその半数が小路家の子供三人で占めるような、ささやかな学校であったが、先生も優しく、友人とも楽

しく過ごしていた。やがて人数も増え新校舎造りにも精を出し、立派な校舎となったが、昭代さんにいろいろな影響を与えてくれた先生方も、次々と召集され、悲しい別れを何度も繰り返した。

昭和十九年六月ごろから開拓団の男子はほとんど召集されて行ってしまった。二十年の八月敗戦となり、開拓団は避難のため長蛇の列をつくり、幾日も歩き続け死亡者は続出、暴民から略奪されるなどの悲劇にあった。昭代さんの家族も、次々と病にかかり亡くなっていった。ハルピンの収容所で第二人が相次いで亡くなり、妹も入院してしまった。次に阿城市に移動が決まっても妹は動かせず、母が残ることになった。母と別れて夢遊病者のように歩く昭代さんを見かねて兄は背負ってくれた。その優しい兄も母の名を呼びながら、阿城の収容所で亡くなってしまった。その十日後に父も兄の後を追うように逝ってしまった。残された姉弟と三人でひたすら、母との再会を待ちわびていたが、それもかなわず姉が亡くなった。妹を看取り、自分も生死の境をさまよいながら、家族の生存を信じ、やっ

と再会をはたした母も、弟の看護に全力を注ぎ、再会後二十日余りののち亡くなってしまった。昭代さんは、弟と生きるため、引き揚げるまでいろいろ仕事を見過つけ、働いた。

八月に入り、帰国準備が開始され、同年代の少年たちが呼び出され、中国に残るよう話され、残ることに返事をしたが、収容所の古老の話を聞くに及んで日本に引き揚げることを決断した、十三歳の昭代さんであった。文学少女ながら、思慮分別をわきまえた昭代さんは現在、幸せな生活を送っている。

(徳引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 命ありて

東京都 田中房春

一、王道楽土を求めて

満州開拓に参加

昭和十三年十二月十日、東京から直行して、満州新京駅に降り立った三人の青年がいた。

寒いとは聞いていたが、初めて体験する零下一〇度の出迎えには、さすがに身震いした。それでも、青年たちの意気は軒昂たるものがあつた。彼らには、大いなる希望があつたのだ。

年長の岡本雅生は三十二歳、小学校の教師を辞し、河野治良二十八歳、田中房春二十四歳で、共に逓信省簡易保険局事務員を辞めて、満州拓殖公社々員として着任してきたのであつた。

昭和七年三月、満州国の成立により、五族協和の王道楽土建設を目指し、満州の農業開発が始まつた。満